

経済学の古典をひもといってみませんか？

アダム・スミス著『道徳感情論』（1759）、『諸国民の富の性質と諸原因に関する研究（国富論）』（1776）

経済学部分館長 赤石孝次
（経済学部 教授）

私の専門は財政学および財政社会学と言われる分野です。政府は国民から税を集め、支出として使っていくわけですが、財政学はこうした政府の活動が、経済的、政治的、制度的、歴史的要因にいかに関与を及ぼし、それらによっていかなる影響を受けるかを分析する学問です。財政学は、経済学、政治学、社会学の複合領域に位置すると言われますが、それらはどれも社会科学の一分野です。社会を構成するのは人間ですから、社会をどのように見るかは実は人間をどのように見るかということなのです。財政学の基礎も実はこの点にあるのです。

日本の財政をながめてみますと、2000年代、経済規模と比較して政府支出はさほど増えていないのに、赤字はいっこうに減らないどころか大幅に増えています。ということは、歳入にあたる税金が不足していることがわかります。なぜ、人々は政府にお金を払いたくないのでしょうか。どうして無駄遣いをしていると思うのでしょうか。この問題を考えるとき、政府に対する人々の感情、心の問題をどのように扱うかが重要なカギになってきます。

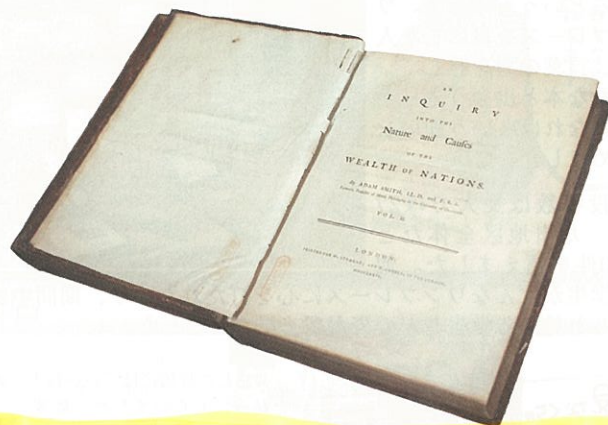
今、近現代史において、日本は、明治維新、敗戦に次ぐ第三の大きな転換の時を迎えています。そこでは社会を支える中心的役割を果たしてきた企業に代わって個人が社会の担い手としての責任を果たすことが求められています。しかし、その個人が国の担い手になることを拒否しています。

こうした状況の中で、経済学では社会と人間とのつながりを明示的に分析の枠組みに取り込み、人間の利己的で、合理的な側面だけでなく、不合理性や社会性、感情の影響を理論化しようという動きが出てきています。財政学では、財政社会学や行動財政学と言われる分野がそれです。

しかし、この問題に約250年前に取り組んだ人がいるのをご存知ですか。そうです、経済学の祖と言われるアダム・スミスです。当時のイギリスでも政府に対する国民の信頼が地に落ちていた点では今の日本と同じです。人は一定の社会ルールに基づいて暮らしており、社会がなければ、生活は成立しません。経済行為も社会ルールがあってはじめて成立します。それでは、社会ルールはどのようにできるかと言えば、人が利己的だけでなく、他人への関心を持つからです。こうした個人を基礎として市場、国家、貿易、成長に関する諸理論を構築し、当時のイギリスが直面していた諸問題に対してとるべき政策を提示していきました。

2000年代に入って岩波書店、中央公論新社、日本経済新聞出版社から『国富論』の新版が、岩波書店、講談社から『道徳感情論』の新版が相次いで出版されたことも

混沌とした社会の羅針盤を求める時代背景と無縁ではないでしょう。さあ、時代に流れの中で忘れ去られていったスミスの大切な宝物を今の時代に蘇らせるために、真理を求める旅に出てみませんか？旅の出発地としてふさわしい場所の一つをみなさんにそっとお教えしましょう。経済学部分館の2階にある武藤文庫（むとうぶんこ）に足を運んで下さい。Adam Smith(1776), *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, Vol.1,2 (London:W. Strahan and T. Cadell) が出版当時のままの姿で君たちの来訪を待っています。そこから先の水先案内は彼に委ねましょう。Bon Voyage!



オススメのこの1冊

●山本太郎 著

感染症と文明：共生への道

中央館2F：岩波新書

493.8/Y31, ID:1549427



エボラ出血熱の流行によるパンデミックのリスクに対する不安が広がる中、是非一読して欲しいのが本書です。そこでは、病原菌の撲滅と公衆衛生の向上を柱とした近代医学の感染症対策の考え方に対して、生態系と人間社会と病原体を共生系として捉え、コスト（犠牲）をも踏まえて共生の道を模索していくポスト近代医学の構築が必要であると主張されています。その主張は、狭い生態学的な視点にとらわれることなく、文明の盛衰に果たしてきた感染症の役割を抽出するとともに、生態系に対して感染症の病原体が適応してきた歴史を編み込むことによって深みを持ったものに仕上げられています。

文学的表現も本書の随所に散りばめられ、自然科学にとどまらず人文科学や社会科学に対する著者の造詣の深さを感じさせる一冊であり、感染症と同時に教養とは何かを考えさせられる書物でもあります。著者の山本太郎さんは、本学熱帯医学研究所の教授です。著者の世界を覗いてみませんか。